

田島利佳 テクニカルディレクター

本国UKのTHE OMM出場から帰国してすぐに3回目のOMM JAPAN2016が開催されました。その間最終準備に支障はないか、楽しんでいただけるか、安全に帰ってくるか、不安とドキドキした気持ちはひよっとしたらみなさんと一緒だったかもしれません。

OMMといえば悪天候をというイメージがあるかもしれませんが、すっかり晴れた2日間、ダイナミックな北アルプスの山々を見ながらフィニッシュを目指したことを、何年たっても記憶に残ることを望んでいます。

今年のコースについて詳細はコースプランナーの小泉に譲りますが、与えられたエリアと環境の中でよりよいコースが出来上がりました。毎年エリアが異なるOMMでは、レースに求められるものが変わってきます。ナビゲーションが難しかったという声があるかもしれません。それを含めてよりみなさんがOMMという総合力へチャレンジしてほしいと願っています。

小泉と谷川は地図調査、地図作製、コース設定、コントロール設置、撤収をほとんど2人でこなしました。国際舞台で活躍するオリエンテーリングのエリート選手だからこそできたことだと思います。

安全管理パートでは、アウトドアでのリスクマネジメントを研究している村越を軸に、地元長野県山岳協会の精鋭、国土舘大学のボランティアらとマーシャル体制を作り、参加者の安全を確保しました。詳細は別途村越からのレポートをご覧ください。

スタートフィニッシュパートは初めての試みとして、完全にエリアで独立した体制にしましたが、効率よく役割を果たすことができました。

計測パートは新しいソフトを導入し、スムーズに計測ができるようにしました。受付ボランティアのみなさんは競技チームをいつでもサポートする体制にしていました。こうした総勢約50名が1,000人の参加者のレースをサポートしました。携わったスタッフのみなさん、ありがとうございました。

リザルトについて、暫定リザルトより大きく2つの変更があります。

まず2日目のスコア最終コントロールについての措置です。プログラムでは最終コントロール(210)を必ず最後にパンチしてフィニッシュすると記載しています。しかしそれを取らずにフィニッシュしたチームがありました。運営スタッフの指示によりそうしたとの連絡がありました。スタッフが指示を出すこと自体が運営の勝手です。参加者は自身でフィニッシュをする、または会場へ戻るということに対し手助けしたことになるからです。ルールを守るのは参加者自身だということをご承知おきください。協議した結果、最終コントロールを取っていないチームはタイムをプラス5分加算することとしました。今後運営スタッフの適切な行動、また地図上の表記の改善をします。

同じく、1日目のスコア最終コントロール(113)についても、それより後にパンチしたコントロールは加点をしていません。

失格チームについてはマーシャル、他スタッフから何件か報告を受けています。日時がわかるものもありますが、ルールから逸脱するという事で両日とも失格としています。

具体的には、地図に表記された立入禁止に進入したチームを失格としました。立入禁止エリ

アは元々危険個所で安全を確保できないために指定しているエリア、地元や地主からの要請等でそのようにしているエリアとあります。OMMの、日本特有の使用エリアとして、里山での開催はこれからも続くでしょう。地元、地域とのより良い関係を作っていくことは必須になります。それは参加者のみなさんもお理解いただき行動していただきたい。地図表記がわかりずらかった点もあるかもしれません。今後改善をしていきます

またフィニッシュ、キャンプ場等で装備チェックをするとともに、必須装備を落としたチームについて失格にしました。今一度どうして必須装備なのかを考えていただけたら幸いです。

ザックを置いてコントロールに向かったチームがありました。ルールに反していることはもちろん、自らの安全を放棄したことになります。タイムよりもリザルトよりも、今一度OMMの精神をご理解ください。

今年はいくつかのルール変更をしています。まずはキャンプ場での携帯電話使用をOKとしたことです。これは1日目無事キャンプ場に到着し、安全であることを家族、友人らに伝える手段にしてほしいということからでした。あくまでもキャンプ場での利用のみということをご承知ください。レース中の利用はしないこと(パートナー同士で離れてしまい電話をかける、SNS等上げる等)、緊急時のみの使用としてください。

さらに装備として2人とも携帯電話必須としました。これは安全管理上の理由で決めたことです。荷物は重くはなりますが安全を優先しました。

今回は草原に近いエリアでのキャンプ場でした。貸トイレを用意し、もともとあったトイレも持ち主のご厚意により使用させていただきましたが、残念ながら使用状態が男女ともよくなかったとの報告を受けています。疲れた体で余裕がないのかもしれないかもしれません。しかしみなさんが気持ちよく使えるような心配りは持っていただけたらな、と思います。

OMMは何もスタートしてからフィニッシュの間だけがチャレンジングな時間だけではありません。装備の準備はもちろん、ルールの理解、プログラムの熟読、スタート時間の把握、正しい地図を取りスタートしていくこと、そういったすべてのことを自ら把握しスタートからフィニッシュに向かってほしい。それがこれからOMM JAPANが続いていく上でさらにみなさんが楽しめる、チャレンジできる時間になっていくのだと信じています。

最後に、参加したすべてのみなさんに、一緒に運営してきたみなさんに、イベントが無事成功できたことを感謝します。みなさんがいいイベントだったと言ってくださったこと、フィニッシュでのステキな笑顔が、わたしたちの次への糧となります。

また来年、お会いするのを楽しみにしています。

OMM JAPAN テクニカルディレクター
田島利佳